

高温(60℃近傍)なのに「心地よい」という設定のびわ温熱法。びわの葉の抽出エキスを全身に塗って加温します。「心地よい」理由はびわの葉の冷たい性質によるものです。温度は高い、けれどもびわ葉エキスは感覚的には冷たく感じる、を同時に行う。すると、実際は熱いのに被験者は熱さを実温度ほどには感じなくなります。・・・(但し、体質別による)



びわ温熱法(全身を加温する)

化学的な薬理作用も解明されています。びわの葉に含まれるアミグダリン(B17)という成分について簡略に解説されたHPがありましたので参考までに・・・。

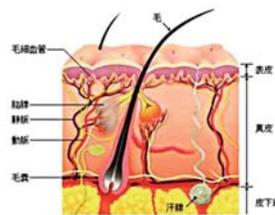


抗ガン作用β-グルコシダーゼという分解酵素が、アミグダリンを分解させることで、毒性となりガン細胞が死滅させます。一方、ガン以外の正常細胞に対してはローダネーゼと言う酵素により保護され、何ら影響を受けません。

アミグダリンにはベンツアルデヒドがあり、酸化されて無害な安息香酸に変わります。これはアスピリンと同様の働きがありガンに伴う痛みを沈静化します。(再生未来クリニックHPより)

### 皮膚呼吸に着目

呼吸は口から、鼻から、つまり肺で行う呼吸「酸素を取り入れ二酸化炭素を排出」というイメージですね。それはその通りなのですが、人間は「皮膚呼吸」という仕組みも持っています。

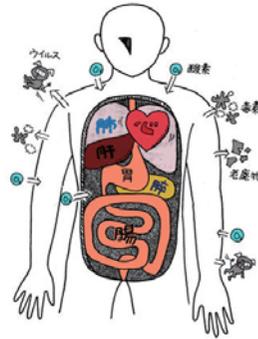


肺呼吸を100とすると皮膚呼吸は0.3程度の酸素しか皮膚から吸収していません。それでも1日量でいうと約200cc牛乳瓶1本分ぐらいの量になります。

長谷部式健康法がこの皮膚呼吸を重要視している理由は主に2つあります。

1つ目は、やはり皮膚呼吸によって得られる酸素の問題。「がん細胞は酸素の少ない環境で増殖する」先述の安保徹先生の理論によれば、がん細胞には酸素でエネルギーを産生するミトコンドリアという組織が少ない。おそらく細胞が原始選りしているためではないかといえます。

がんの人は皮膚呼吸が悪いと思えることが多い。事実、がんの人は発汗不足を自覚されている人が多いようです。これらのことから、がん細胞が嫌う酸素の取り込みをスムーズにしたいという考え方をまず挙げたい。



2つ目は「排毒」という観点です。「出せば入る」の法則を考えてみます。食品添加物、農薬、化粧品、大気汚染、水質や土壌の汚濁、ストレス過多、飽食過食、運動不足、発汗不足など現代人の多くは体内にいらぬもの=毒素を抱え込んでしまっていると考えます。

いらぬものを出さない限り、要るものは入りません。皮膚の模式図からもうかがえるように人間の皮膚は広さ約1.8平方メートル、皮膚の重さ6~10Kg(体重の約10%)、発汗能力では最大でおおよそ10リットルもあるといわれます。『汗をかけない人間は爬虫類化する』五味常明著によれば、「汗をかく」と表現するところの汗腺であるエクリン腺は形態学的にみても、身体器官の中で一番最後にできたそうです。それで未熟なために血漿に含まれた有害金属も汗と一緒に出てしまうことがある。つまり、汗腺も排出器官となりうるというのです。

それではサウナで汗を流すだけでよいかと問われるとそう単純ではありません。びわ温熱法ではびわの葉のエキスが過酸化脂質などを溶かし出す性質を持ちますが、サウナにはそれがありません。



がんが逃げ出すほどの高温、それでいて心地良い、さらに体内の老廃物を排出する、このトリプル打で煩わしい病とは縁切りしたいものです。



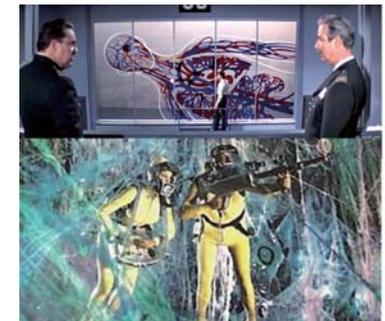
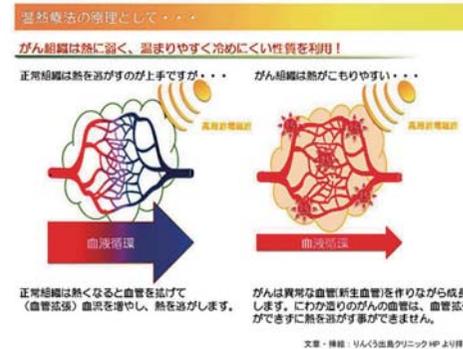
# 健康会だより

＜主旨と理念＞  
長谷部式健康会は『自分の健康は自分の努力で』をスローガンに健康普及活動をしている会です。健康は人生最高の宝です。世界人類の健康と平和に奉仕しましょう。『体質別』は健康を守る自然の法則です。

発行所 長谷部式健康会 総本部  
〒491-0905 愛知県一宮市平和1-2-13  
発行人 長谷部茂人  
発行部数 3000部  
tel 0586-46-1258  
fax 0586-46-0367  
Eメール hello@hasebe-kenko.com  
URL http://hasebe-kenko.com/



## nekomo shakushimo 温熱療法 ～身体を温めると何がよいのか!??～



映画「ミクロの決死圏」(1966)

### 温熱療法とは?

温熱療法は現在、免疫療法などと共にがんの治療法の一つとして認知されるようになりました。(※標準治療としてはなく、通常の治療法では治すことが難しい局所進行がんや再発がんなどに用いられます)

国立がん研究センターの情報では全身に加温する「全身温熱療法」と、がん部位にターゲットをあわせた「局所温熱療法」に分けて解説されています。

(解説) 一般には局所温熱療法が主に行われる方法で、マイクロ波や電磁波を用いた装置で局所を温めます。がんに対する効果は41℃以上で得られますが、42.5℃以上で特に強くなることが知られています。体の表面に近いがんは目的の温度まで比較的容易に温めることができますが、体の奥深いところにあるがんは、脂肪、空気、骨が邪魔をして十分に温めることが難しい場合が多く、温熱療法の効果が不十分になる可能性があります。加温時間は長ければ長いほど効果が増しますが、一方、治療を受ける患者さんの負担が大きく、45~60分ぐらいが普通です。毎日治療をするとがん細胞が熱に強くなり、温熱療法の

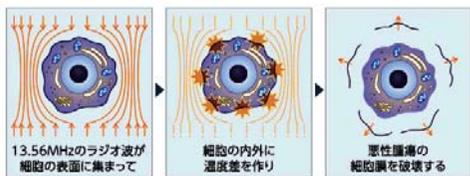
効果が下がりますので、3日くらいは間隔を空けて治療します。週に1~2回治療するのが一般的です。

がん細胞が熱に弱いことは古くから知られています。なぜ効くか?の理屈は簡単です。がん細胞は正常細胞と違ってにわか造り、不出来な細胞で、周囲に新生された毛細血管は伸縮性に乏しく、加温されると熱がこもってしまう。つまり高温になりやすく、かつ不出来なので壊れやすいという性質によるものです。

### 温熱療法新時代

1966年製作映画「ミクロの決死圏」を覚えておられる方もいることでしょう。人間を潜水艇に乗せて船ごと縮小光線を当て、その小さくなった潜水艇を人間の血管に送り込み患者さんの腫瘍を攻撃し破壊する物語です。できた傷口に血小板が誘導されて張り付くところなど、とてもリアルに作りこまれていて、作品の出来以上に「将来の医療はこうなる!」と子ども心に思ったものです。

そして現在、映画の世界が現実化しようとしています。極小さなミクロ、さらにナノサイズ化が鍵になろうと・・・。



ラジオ波を用いた局所温熱療法では、細胞の内外での温度差を生じさせ、がん細胞を破壊に至らしめるとされています。がん細胞がナノサイズ(10~100ナノメートル)の孔?をいくつも持つという不出来な点に着目した治療法です。

サイズはやや大きくなりますが、マイクロカプセルで局所を加温するという考え方は20年以上も前からありました。磁性アモルファス金属フレークに抗がん剤を附着させ、ポリマーコーティングした微粒子を患部に流入させ、一部分だけを温熱+抗がん剤で攻めるのです。



Fig. 10 Soft X-ray film of the dog kidney after TAE with the microcapsules

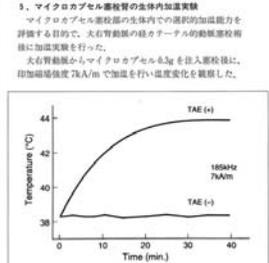
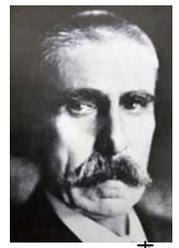


Fig. 11 Heating test of the dog kidney after TAE with the microcapsules

局所を選択的に加温できるという意味においては先進的試みですが、治療後の金属フレークの残存、毒性の問題なのか、その後の話題は少なくなっています。

全身温熱という考え方

「ヒポクラテスやガレノスが、まれに発熱療法によって劇的な改善をみる。もしも何か良いものがかくれていなければ、このような考え方は、もっと早く捨て去られていたに違いない」



ユリウス・ヤウレロド (1857-1940)

神経梅毒の進行麻痺または麻痺性痴呆に対する発熱療法の開発で、1927年ノーベル医学・生理学賞を受賞したヤウレグ博士。ノーベル賞受賞に至ったその画期的治療法は、発案、実施、経過、すべてにおいてコノ時代の産物としか言いがたない。その名もアッと驚く「マラリア療法」。



↑ マラリアの流行域(アジア・オセアニア・アフリカ)  
→ マラリアを人へと媒体するハマダラカ



マラリアが流行する地域では進行した神経梅毒患者が少ない。もしかしたらマラリアに感染し発熱することで神経梅毒の進行が抑制されているのではないかとヤウレグ博士は考えました。そこで梅毒患者に意図的にマラリア感染させ人体実験をしました。その結果、患者はマラリアの劇症で死んでしまった！

一旦は研究を諦めかけたヤウレグ博士。しかしある時、劇症の熱帯性マラリアでは全くダメだが、間欠性の三日熱マラリアだと成績が良好になることに気づきました。

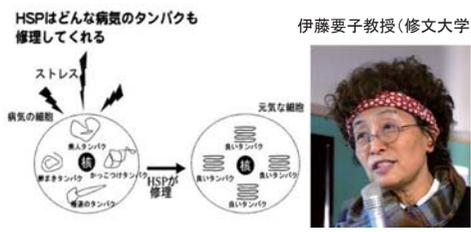
発熱、つまり全身の体温上昇で神経梅毒を治すには一定のリズム、緩急が必要だったのです。

HSPはあらゆる病気を治す

地元自治会で伊藤要子先生(修文大学)が本講演、私が前座講演という機会を得ました。伊藤先生はHSP(ヒートショックプロテイン)の専門家です。HSPは別名、熱ショックタンパクと呼ばれています。このHSPは修復タンパクに属されていて、身体のタンパク質に異変が生じたときに働く性質を持っています。

伊藤先生の講演時間2時間のほとんど「からだを温めてください」という内容。からだを温めると何が良いのか?では、次々と・・・。

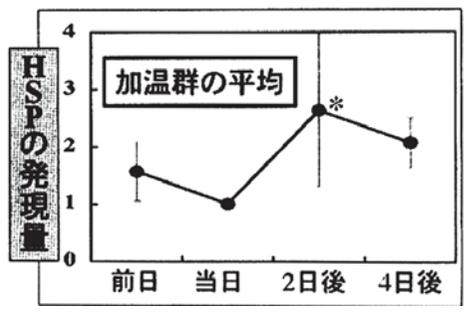
- 1、生体防御作用が得られる。
- 2、がんや細菌を殺す力が強くなる。(感染しにくくなる)
- 3、薬剤の細胞内取り込みが良くなる。(薬剤がよく効く)
- 4、運動能力が向上する。
- 5、代謝が活発になる。(細胞が元気になる、脂肪が燃焼される)
- 6、老廃物が汗から出る。
- 7、痛みが緩和される。



伊藤要子教授(修文大学)



何でも効果があるHSP。あらゆる病気を良くしてしまうのではないかと思えるほどよく効く。しかし欠点もはっきり、「何にでも効くが、すぐ効果がなくなる」ということ。



上のグラフでは、加温後2日をピークに直後から下がっています。それから、よく見ると温熱当日よりも前日のほうがHSP量は多い。ということは、連日加温しているとHSPの発現量が増えるどころか逆に下がってしまう可能性があります。

先ほどのマラリア療法を推測しますと、連日発熱が続く劇症の熱帯性マラリアでは失敗し、3~4日の間で発熱が途絶える三日熱マラリアだと成功したのは温熱に休みを設定するインターバルが鍵だったのでしょう。

Hints

ここまで温熱療法の観点をまとめてみます。

- 1、がん細胞は「にわか造り」なので新生された血管の柔軟性がないために温熱等一定条件下で毛細血管、そしてがん細胞が破壊されることがある。
- 2、破壊された部位を良い状態に修復するHSPという修復タンパクがある。
- 3、そのHSPは温熱加温によって増加・増幅される。
- 4、HSPを最大に誘導するには3日前後のインターバルで温熱加温することが望ましい。

温熱法は心地よく感じないと効かない

温熱加温でがんを撃退、HSPで正常に修復という理論は分かりました。しかし、がんを破壊するほどの温度(42℃以上)を実際に人体を加温するには、相当な高温が求められます。例えば50℃のお風呂に入れる人は、ほぼゼロです。入れたとしても直後に倒れて救急車を呼ぶ羽目になるかもしれません。

一般的にこれほどの高熱に対する私たちの感覚は、避けたいと感じるほどの不良になるはずです。



加えて「熱い」「苦しい」「緊張」といった状態は交感神経が高まる状態を意味しています。新潟大学名誉教授の安保徹先生によれば、がんになる人は常に交感神経優位な生活を強いられることを指摘しておられます。心身の負荷を努力と忍耐で過ごす・・・頑張り過ぎはカラダにはマイナスです。



安保徹名誉教授(新潟大学)

という訳で温熱法を受ける人の体感が「熱苦しい」ようでは、がんが小さくなるどころかむしろその逆になっても仕方ありません。

そこで考え出されたのが「長谷部式健康法」です。まず次の図をご覧ください。